九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ファーディナンドの狂気：「マルフィ公爵夫人」に関する覚書

蛯原，啓

https://doi.org/10.15017/2332725

出版情報：文學研究. 73, pp.1-16, 1976-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ファーディナンドの狂気

――『マルフィ公爵夫人』に関する覚書――

蛯原　啓

『マルフィ公爵夫人』に登場する人物の中で、最も私の興味をそそる人物は、公爵夫人の双子の兄弟で兄にあたるファーディナンドである。もちろん、主筋はあくまで公爵夫人とアントニオの悲話であり、それにボソラの改心が劇全体の主題に大きな意義を与えていることはいうまでもない。にもかかわらず、ファーディナンドが最も強烈な印象を我々に残す。同じ兄弟の悪党でも、マキアベリアンの枢機卿の最期がファルスでしかないのに較べて、ファーディナンドの最期は悲劇的でさえある。考え方によっては、ファーディナンドこそ劇中最も悲劇的な人物かもしれないのである。

第一幕第一場において、枢機卿とファーディナンドの兄弟は、公爵夫人の再婚を恐れてボソラをスパイに雇うことを決め、ファーディナンドが直接ボソラに話をする。即ち、妹を注意深く見張って、求婚者がいるかどうか、もしいるとすれば、誰を彼女自身は一番愛しているかを探れ、というのである。その際、ファーディナンドは「彼女を再婚させたくない」（"I would not have her marry again"）（一・一・二五六）[6]といい、ボソラが理由

を問わないうちに、素早く「理由など聞くな。俺がいやだということで納得しろ」(“Do not ask the reason: but be satisfied,/ I say I would not.”)(一・一・二五七―五八)とだけいって、理由らしきことは何もいわない。というよりむしろ、理由を述べることを拒絶する。従ってこの段階で、彼がなぜ妹の再婚を望まないのか我々にはよくわからない。ただ、同じ兄弟でも、枢機卿とファーディナンドの間には、はじめから考え方にかなりのずれがあることは明らかである。即ち、枢機卿は、家名を傷つけるような再婚は許さない――つまり逆にいえば、名誉ある結婚であれば反対しない、ということなのか――と妹にいっているのに対して、ファーディナンドの方は、妹の再婚という考えそのものを忌わしいものとして捉えているのである。

確かに、未亡人の再婚は、当時はもっと偏見を以てみられていたと考えられる。もちろん、再婚を禁じることは出来ないが、特に身分の高い夫人にあっては、再婚は決して立派な行為ではなかった。たとえ再婚するにしても、同じ階級、或いはそれ以上の男性を夫人とすべきであって、自分の召使いと結婚するというのは論外であったに違いない。しかも家族の者にも相談せず、秘密裡に結婚するというのは、非難さるべきものであった。[2] 従って、ファーディナンドが妹の再婚という考えそのものを嫌悪し、「結婚だと！再婚なんかするやつは淫らなやつにきまっている」(“Marry！ they are most luxurious / Will wed twice.”)(一・一・二九七―九八)といい放つのは、それ自身決して異常なことではない。これに似た考えは、たとえば『ハムレット』の劇中劇の王妃の台詞にも見出される。

In second husband let me be accurst!.
None wed the second but who kill'd the first....

The instances that second marriage move
Are base repects of thrift, but none of love.
A second time I kill my husband dead,
When second husband kisses me in bed.（Ⅲ. ii .175-76；178-81）③

もう一つ例を挙げれば、未亡人の再婚を諷刺したチャップマンの『寡婦の涙』（一六一二年出版）の中で、伯爵の未亡人ユードーラ（Eudora）の待女スシニア（Sthenia）は、伯爵夫人が再婚するはずはない、と確信している。

I have been witness...to her open and often detestations of that incestuous life（as she term'd it）of widows' marriages, as being but a kind of lawful adultery, like usury, permitted by the law, not approv'd; that to wed a second was no better than to cuckold the first; ...（Ⅱ. iv .20；26-8）④

実際には、上例の二人共再婚してしまうわけだが、このような再婚観というべきものが当時広く行われていたことは事実であろう。もちろん、当時にあっても、理想と現実が違うことは、チャップマンの諷刺にある通りである。しかし、少くとも理論的には、以上述べたような再婚に関する道徳律が存在していたと考えて差支えないであろう。⑤

ウェブスターが素材として使ったといわれているウィリアム・ペインターの *The Palace of Pleasure* の場合、明確なモラルがあって、公爵夫人とアントニオの悲劇を「鏡」として、情欲に溺れたり、身分違いの者と結婚

するのは避けよ、ということであった。従って、アラゴン兄弟の復讐は、公爵夫人がアラゴン家の血を汚したという判断に基づくものであって、そこにはファーディナンドの激憤はあっても、発狂もないし、近親相姦的な愛もない。従って、夫人に対する彼らの復讐にもウェブスターのような残忍さはない。

ペインターと違って、ウェブスターの場合、公爵夫人の情欲の部分が大幅に切り捨てられている。確かに、公爵夫人の再婚について、待女のカリオラが“a fearful madness”を示しているといったり、人々が夫人のことを”strumpet”と噂したり、コーラス的な巡札者が召使いとの結婚を批判したりする箇所はあるけれども、劇全体としてみた場合、作者が公爵夫人の再婚を非難しているとはいい難い。作者は、我々の同情を明らかに公爵夫人の側にひきつけているからである。

しかしそれはともかく、当時の一般的なセンチメントから考えるならば、ファーディナンドが妹の再婚を嫌う気持はわからぬではない。ただ、両者が初めて対面する場面（第一幕第二場）から、ファーディナンドは、性（セックス）や情欲に対して異常なほどのオブセッションを抱いているのである。再婚する者は「淫らな」人間と決めつけ、そういう連中の肝臓には「ラバンの羊よりもっと沢山斑点ができている」(“more spotted / Than Laban's sheep.”)（一・一・二九八―九九）といったり、“whores” “lustful pleasures” “lamprey” 等、彼の口から出てくる言葉には、明らかに性的オブセッションが感じられる。

そのオブセッションが高じて半狂乱状態に達するのが、いうまでもなく、公爵夫人に子供が出来たとの知らせを受けた時である。この場面、即ち、第二幕第五場は、ファーディナンドの「今夜俺はマンドレイクを引き抜いてきた」(“I have this night digg'd up a mandrake.”)で始まる。これは、いわばファーディナンドの心の謎を解く鍵になる重要な台詞である。周知の如く、マンドレイクはその根が二股に分かれていて、人間の形に

似ているが、古来これは悪魔の化身ともいわれ、土から引き抜く時には奇声を発し、その声を聞いた人を狂わせたり、死に至らしめるとさえいわれていた。また一方では、不妊を治す薬にもなるが、媚薬としても用いられ、他方多量飲むと人を狂わせるども考えられていた。従って、マンドレイクは狂気を暗示するのみならず性的な意味をも含んでいるのである。[6]即ち、この場面におけるファーディナンドの半狂乱状態と異常な興奮状態が、彼の心の奥底で性(セックス)に結びついていることをこのマンドレイクは暗示しているのである。

従って、枢機卿があくまで冷静な反応しか示さないのに対して、ファーディナンドはすぐに激昂し、兄でさえ辟易するほどの半狂乱状態に陥ってしまう。枢機卿は、まず家名に傷がつくことに憤りを感じる。それが妹の再婚に対する彼の唯一の反対理由なのである。しかし、ファーディナンドはそんなことには一言もふれないで、専ら妹の性的行為に思いを馳せる。

Methinks I see her laughing—
Excellent hyena!—talk to me somewhat, quickly,
Or my imagination will carry me
To see her, in the shameful act of sin. (II・v・38－41)

妹と色々な男との性行為を脳裡に想像し、極度の興奮を覚えると共に、極度の嫌悪感に悩まされるのである。[7]台詞の中で誰よりも多く性に言及し、性に異常な関心をもつ男が、既に一度は結婚したことのある妹の性行為に——というよりはむしろ、それを脳裡に浮かべるだけで、発狂せんばかりの嫌悪感を示すとはどういうこと

なのか。嫌悪感と興奮状態――これは明らかに、批評家がほぼ一致して指摘しているように、ファーディナンドの妹に対する近親相姦的な愛を暗示するものである。[8] 他の男と交わる妹への愛と憎悪が錯綜して、ファーディナンドの複雑な心理状態を醸し出しているのであり、作者の描写は見事という外はない。

ボソラからの手紙をみたファーディナンドは、「妹の奴、ふしだらになりおって、売女になりさがったわ」（"... she's loose i'th' hilts: / Grown a notorious strumpet.")（二・五・三―四）といって捲し立てる。枢機卿の「お前は理性を失っている」（"You fly beyond your reason"）（二・五・四六）という制止の言葉も聞かず、今度はそこにいもしない妹に向って、直接怒りをぶちまける。

Go to, mistress!
'Tis not your whore's milk that shall quench my wild-fire,
But your whore's blood.　（II. v. 46-8）

枢機卿にとって、ファーディナンドのこの突然の憤激は理解し難いことである。

... this intemperate noise
Fitly resembles deaf men's shrill discourse,
Who talk aloud, thinking all other men
To have their imperfection.　（II. v. 51-4）

枢機卿には弟の気持など少しも分っていない。彼自身は、どんなに怒ろうとも冷静でいられる性格の持ち主だからである。従って、同じく名誉を汚されたことへの復讐といっても、その含む意味は、両者の間でまるで違っているのである。

復讐の動機という観点から考えれば、枢機卿にしてもファーディナンドにしても、なぜ妹をあれほどまでに苦しめなければならないのか、との疑問が最後まで残る。枢機卿の場合、アラゴン家の家名に傷がついたということ以外に何もないはずである。ただ、ファーディナンドの場合はもっと複雑である。彼にとって、真の動機は、名誉のためでもなく、ましてや財産を得るためでもなく、むしろ彼自身が一言も口にしない――しかも周囲の者も誰一人として言及することのない――秘められた邪恋にあることは明らかであろう。だからこそ、サディスト的な方法で妹を死へ追いやったのである。妹に男がいることを知ったファーディナンドは、その男を探り出そうとするが、その男に対して復讐を計画するのではなく、まず妹に復讐の鋒を向けるのである。その証拠に、第三幕第二場で、公爵夫人の寝室に忍び込んだファーディナンドは妹に自殺を迫るが、すぐ近くに隠れていると思われる男と顔を合わせる気もしなければ、その名前すらすぐに聞き出そうとはしない。そして、妹に長々と「評判」の寓話をして聞かせるのである。彼にとって、男のことなどさほど重要ではなく、妹の汚れが問題なのである。「あいつの罪と美しさは、溶けあって癩病のようになり、腐れば腐るほどそれだけ一層白くみえるのだ」("... methinks her fault and beauty, / Blended together, show like leprosy, / The whiter, the fouler.") (三・三・六二―四) というファーディナンドの言葉の中には、自分の抱いている妹の白く美しい姿と他の男に身を任せた妹の淫らな、そして腐れはてた姿が、彼の脳裡から離れないことを示している。[9] 男がアントニオであることを知ったファーディナンドは、

Antonio!
A slave, that only smell'd of ink and counters,
And ne'er in's life look'd like a gentleman,
But in the audit-time.　（Ⅲ. iii. 72—4）

と、アントニオに対して甚だ軽蔑的である。彼には、妹がアントニオのような男を愛するなどとは到底考えられないのであろう。

公爵夫人の夫の名前が判明すると、ファーディナンドの復讐が始まるわけだが、彼女を投獄し、暗闇の中で「死者の手」を妹に与えたり、アントニオと子供たちの蠟人形をみせて彼らが死んだものと思わせたり、その遣り口が甚だ異常で、病的である。ボソラですら同情を禁じえなくなる。

Bos.　Why do you do this?

Ferd.　To bring her to despair.

Bos.　Faith, end here:
And go no farther in your cruelty —
Send her a penitential garment to put on

Next to *her delicate skin,* and furnish her
With beads and prayer-books.

Ferd Damm her! *That body of hers,*
While that my blood ran pure in't, was more worth
Than that which thou wouldst comfort, call'd a soul—

（Ⅳ. i. 116–23）（斜体筆者）

何気なく使ったボソラの「彼女の柔らかい皮膚」という言葉が、反射的に「あれの肉体（からだ）」となってファーディナンドから跳ね返ってくる。明らかに妹のからだに対するオブセフションが感じられる。作者の筆は絶妙である。

ファーディナンドの狂気の徴候は、第二幕第五場、即ち、公爵夫人が子供を生んだ知らせを聞いて半狂乱になった時に、既に始まっているといっても過言ではない。その時点で既に、彼の心は闇の世界、地獄の世界へ志向している。事実、既に暗闇の中でしか、妹に会うことが出来なくなっている。更にその後、第三幕第二場で、妹に対して「狼の吠える声も、お前に較べれば音楽だ」（"The howling of a wolf / Is music to thee,…"）（八八—九）とファーディナンドがいっているのも、作者が意図的に劇的アイロニーとして使ったものであろう。

狂人狂騒曲ともいうべき狂人たちの歌と踊りの場面は、我々には極めて低級な悪趣味としか思えないのだが、

ファーディナンド自身の発狂がいよいよ近づいたことを象徴するものといえよう。この狂人たちの余興は、公爵夫人を絶望に陥らせ、究極的には狂気へ追いやらんとする試みなのだから、その象徴的意義は大きい。しかし、ファーディナンドの意図とは裏腹に、この狂騒曲に囲まれて、公爵夫人はかえって落着きを取り戻し、極めて静かな、しかも堂々とした最期を遂げる。来世を信じ、自らの過ちをも認めた上で、静かに死を受け入れるのである。即ち、狂人たちのこの場面は、公爵夫人が逆境にあってますます威厳を保ち、落着きを深めてゆく一種の引立て役(foil)として機能しているのに対して、これがファーディナンドにとっては、自分のために自ら用意した狂気への序曲となっているのである。後になって、自ら絶望し、発狂して地獄を語る時、ファーディナンドの運命のアイロニーは完璧なものとなる。

自ら妹の殺害を命じておきながら、それをボソラが忠実に実行すると、ファーディナンドはまことに奇妙な反応を示す。殺された子供たちのことは「狼の子」と呼び、何ら憐れみの情を示さないけれども、扼殺された妹の美しい姿をみると、「眼が眩む」(“Mine eyes dazzle.”)(四・二・二六四)といって、まともに顔を見ることすら出来ない。しかも、奇妙な言訳を並べたてて、ボソラの行為を逆に責める始末である。つまり、妹を憐れんで、自分の復讐から潔白な彼女を守るべきだった、というのである。ボソラに与えた命令は、自分が取り乱していた時に与えたもので、自分の「最愛の友」(“my dearest friend”)(四・二・二八〇)を殺したことは実に怪しからん、というのである。

What was the meanness of her match to me?
Only I must confess, I had a hope,

Had she continu'd widow, to have gain'd
An infinite mass of treasure by her death :
And that was the main cause :... (**IV**. ii .282-86)

誰もが指摘しているように、公爵夫人は、前の夫との間に長男をもうけていたのだから、このファーディナンドの理由は言訳にもならぬくらいお粗末なものである。それにもかかわらず、彼がはっきりと動機らしきことを述べるのは、家名に傷がついたという一般的理由を除けば――しかもこれは、上の引用文の冒頭では否定している――この箇所を除いて外にない。動機の曖昧性が指摘される所以である。

従ってここで重要なのは、上の引用文にすぐ続く「あれの結婚!それが俺の心を憎しみで貫いたのだ」("...her marriage! —/ That drew a stream of gall, quite through my heart.")(四・二・二八六—八七)という言葉である。妹の結婚がなぜそれほどまでに兄の心を乱すのか。

確かに公爵夫人は、身分の低い者と結婚したり、宗教を隠れ蓑に使ったり、嘘をついたりして、いくつかの点で批判の対象になってはいるが、彼女が実際に受ける冷血な仕打ちと残忍な死に値いするような罪を犯したかどうかは甚だ疑問である。彼女が受けるサディスティックな迫害は、加害者ファーディナンドの近親相姦的な愛の犠牲として捉える時、初めて理解が可能になるように思われる。

ファーディナンドがボソラに対して、妹の再婚に反対する「理由は聞くな」と明言している事実は、彼自身に理由があることを示している。ただ、理由を述べることを拒否しているに過ぎない。妹に対して抱いている感情に彼自身気がついていないのだ、とする解釈には賛成しかねる。[10] 要するにファーディナンドの場合、彼が

いわば公式に述べる理由と心の中に秘めている真の理由とが明らかに違うのである。彼自身それに気づいているからこそ理由にふれたくないのである。ファーディナンドのこの態度は最後まで一貫していて、我々はついに、彼の口から公爵夫人迫害の真の動機について聞かされることがないのである。他の登場人物もそのことには一切ふれないのであるから、作者が故意に伏せているとしか考えられない。にもかかわらず、ファーディナンドの言動から、彼が口にしてはならない罪を意識していることは否定出来ない。従って、ファーディナンドの復讐は、妹の汚れた血を浄化することによって、自らの体内に蝕んでいる罪の血を浄化せんとする一種の"ritual purgation"[11]であるとするコールダーウッドの説は大変魅力的である。ファーディナンドは、その際、医者兼僧侶兼死刑執行人となり、公爵夫人を身代りの生贄に供する、というのである。[12]

ファーディナンドの秘めたる近親相姦的な愛は、その捌け口を見出しえず、ついに狼狂という形で爆発する。作者は、数回にわたって「狼」という言葉をファードナンドに言わせ、少しずつ周到に準備してきたのである。では、ファーディナンドの発狂は一体何を意味するのであろうか。

発狂後、舞台に現われたファーディナンドは、自分の影を追い掛け回す。人を遠ざけている様子だが、狂気の中でも彼が地獄を意識していることは注目すべきである。彼は「地獄へ行く時は、賄賂をもって行くつもり」("When I go to hell, I mean to carry a bribe.") (五・二・四一―二)なのである。更に、誰からも聞かれもしないのに、「やってしまったことは、もうどうにもならん。何も白状なんかせんぞ」("What I have done, I have done : I'll confess nothing.") (五・二・五三―四)という時、自ら過ちを認めるのではなく、むしろ居直った形になってはいるが、彼が良心の呵責に悩まされていたことを暗示している。その点、同じような台詞を吐くイアゴーとは根本的に違っている。従って、ボソラが指摘しているように、ファーディナンドの狂気は、まさしく天罰("a

fatal judgement”)(五・二・八五)によるものなのである。冷血無情であるだけに、狂気という天罰は訪ずれなかったけれども、枢機卿もまた罪の意識に悩まされ、自らが行かねばならぬ地獄の炎の問題に悩まされ、悪魔[13](“a thing, arm’d with a rake”)(五・五・六)を意識しているのである。ただ、枢機卿の場合は、因果応報として自らの過ちをはっきりと認めた上で、最期を遂げる。作者が意識的にこの悪魔のような二人の兄弟と地獄を結びつけようとしていることは明らかであろう。同じ兄弟でも、公爵夫人が天国で夫や子供たちに会えることを信じながら、静かに死を受け入れていった様子とは著しい対照をなしている。

狂ったとはいえ、その原因が原因だけに、ファーディナンドの頭の中は、妹のことで一杯であり、夢遊病のマクベス夫人を思わせるものがある。「締め殺すのは実に静かな殺し方だ」(“Strangling is a very quiet death.”)(五・四・三四)と独り言をいったり、更に、

> What say’ to that? whisper, softly : do you agree to’t?
> So it must be done i’th’ dark : the cardinal
> Would not for a thousand pounds the doctor should see it. (V . iv .36-8)

と呟き、妹扼殺のことが頭から離れない。事実、彼はボソラと兄を刺し、自らもボソラから致命傷を受けて、「俺の妹！ああ妹！あれがすべてのことの起りだ」(“My sister! O! my sister! there’s the cause on’t.”)(五・五・七一)と妹を呼びながら死んでゆく。

ファーディナンドの発狂が天罰によるものだとすれば、彼が犯した過ちは何か。妹に対する情欲を体の中で

抑制はしたものの、それが暴力となって顕在化し、妹や子供たちを迫害し、殺害させたことである。彼の妹に対する情欲については、既に述べたように、テクストの中で直接言及されてはいないけれども、彼の心の秘密は、到る所で巧みに暗示されている。即ち、近親相姦的な愛というような言葉を一度も使わずに、しかもその感情を暗示することに成功しているのである。たとえば兄妹の間の近親相姦的な愛情を主題としたフォードの『あわれ彼女は娼婦』の場合、実際に過ちを犯すにいたるジョヴァンニは、妹のアナベラに対して、

The love of thee, my sister, and the view
Of thy immortal beauty hath untuned
All harmony both of my rest and life. (I, ii, 212-14)

と、はっきり愛の告白を行うのである。この愛の告白は、ある意味では、ファーディナンドの心の状態に酷似していないだろうか。また、ボーモントとフレッチャーの『王にして王に非ず』(一六一九年出版)において、イベリア王アーバシーズは、妹パンシアに対する情欲に苦しみ、台詞の中でもはっきりと近親相姦的愛に言及し、自分との闘いを展開するが、理由もなく、愛するパンシアを監禁する。尤もこれは、結局二人が血を分けあった兄妹ではないという事実が判明し、めでたしめでたしで終るわけだが、近親相姦に対する罪悪感が極めてまじめに表現されているので、ここで比較のために言及しても場違いとはならないであろう。

ウェブスターにしても、ファーディナンドに妹の美しい姿(遺体)をみて「眼が眩む」といわせているのであるから、その点を台詞の中でもっとはっきりさせようと思えば、いくらでも出来たはずである。しかし、作

者はそういう方法を採らず、むしろサジェッスチョンにとどめた。その曖昧性が劇的にマイナスになっているとは少しも考えられない。

ファーディナンドの狂気を特に狼狂（lycanthropia）としたのにも、それ相応の理由があるものと思われる。既に述べたように、ファーディナンドにとって妹への復讐は、決して名誉を傷つけたからというような単純なものではなく、エリザベス・ブレネンが指摘しているように、「妻の不義に対する夫の復讐」[14]の観が強い。ファーディナンドの嫉妬が怒りとなって爆発し、更に狂気へと発展するのである。狂気や愛人の姿に取り付かれた状態は、恋の病の徴候であり、特に恋する者が焼き餅をやくと、狼狂の犠牲になるといわれていたらしい。[15] このように考えると、ファーディナンドの近親相姦的な愛は、ますます明確なものになるし、作者もそれを意図したものと確信を以ていえそうである。ファーディナンドの心の中に隠されていた複雑な葛藤が、抑えに抑えられて、ついに狼狂となって顕在化するという極めて極端な方向へ進む時、彼の度重なる蛮行は許し難いとしても、近代精神病理学的な意味での悲劇性を彼の中に見出したくなるのは行き過ぎであろうか。兄の枢機卿がマキアベリアンの類型に堕しているのに較べて、弟のファーディナンドの精神病的な性格描写は、十七世紀初めの作品にしては、何と複雑で、斬新ではないか。

註

①引用はすべて J. R. Brown, ed., *The Duchess of Malfi*; Revels Plays (London : Methuen, 1964) による。

②M. C. Bradbrook, *Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy* (Cambirdge University Press, 1960), pp. 199-200.

③引用は Peter Alexander の版による。

④引用は E. M. Smeak, ed., *The Widow's Tears,* Regents Renaissance Drama (London : E. Arnold, 1967) による。

⑤当時は再婚観については、F. W. Wadsworth, "Webster's *Duchess of Malfi* in the Light of Some Contemporary Ideas on Marriage and Remarriage," *PQ,* XXXV (1956), 394–407 参照。

⑥J. L. Calderwood, *"The Duchess of Malfi* : Styles of Ceremony, " *Essays in Criticism,* 12 (1962), rpt. in *John Webster : A Critical Anthology,* eds. G. K. & S. K. Hunter (Penguin Books, 1969) , pp. 266–80.

⑦この場面のすぐれた分析（特にクムシットとの比較等）については、野島秀勝氏の『近代文学の虚実』（南雲堂、一九七一）、一一七〇―一七五頁を参照されたい。

⑧Clifford Leech, *John Webster : A Critical Study* (London, 1951 ; rpt. New York : Haskell,1966), p. 100 をはじめ多数あるのでいちいち挙げない。

⑨lust を leprosy に譬える例は、フォードの『あわれ彼女は娼婦』（一六三三年出版）の中で修道僧がジョヴァンニを論す言葉の中にもみえる。"Beg Heaven to cleanse the leprosy of lust / That rots thy soul,..."(I . i .74–5) 引用は以下 Brian Morris, ed., *'Tis Pity She's a Whore,* New Mermaids (London : Ben, 1968) による。

⑩Cf. Clifford Leech, *John Webster,* p. 100. J. R. Mulryne, *"The White Devil* and *The Duchess of Malfi",* in *Jacobean Theatre,* eds. J. R. Brown & B. Harris, Stratford-upon-Avon Studies I (London : Arnold, 1960), pp. 222–23.

⑪⑫ Calderwood, p. 277.

⑬Elizabeth Brennen, "The Relation of Brother and Sister in the Plays of John Webster," *MLR,* 58(1963), rpt. in *John Webster: A Critical Anthology,* eds. G. K. & S. K. Hunter (Penguin Books, 1969), p. 295.

⑭⑮ Ibid., p. 294.